

岩本の実相寺

一

岩本の実相寺は（東海道線富士駅よりバスにて約十分、富士川の辺にある）岩本山実相寺と称して、人皇七十四代鳥羽法皇の命を受けて久安年間（八百年前）に比叡山横川の知印法師が建立した勅願寺である。

寺の背後の岩本山に登れば、富士天子嶽は北にそばだち、東には愛鷹の連峰がつらなり富士川の漫々たる水勢は、松野岩淵の山勢に随いつつ北より南に走つて、西方山の麓をめぐつて南海に入る。虚空の大きさをまだ小さしとして映し出す蒼海、それをいあくような伊豆の海辺の連山。まことにこゝは山と海と川との眺望を恣にする東海の一勝地である。

その昔智証大師が入唐の砌り伝来の唐本の大蔵経二本があつたが、一本を江州三井寺に蔵め、一本を実相寺創立の時山上に安置したと伝えておる。実相寺は当時の境内地一里四方七堂伽藍は

いふもおろか、五百の僧堂薨をならぶと、文久元年実相寺発行の寺歴に伝えておる。今は史実の証をしておる暇はないが往年の実相寺はまことに荘麗なものであったらしい。この壮大な建物も、永禄十一年甲斐国武田信玄によつて焼失され、現在の建築物はその後のものである。

正嘉二年の正月、岳麓の春は日中は三月位のあたたかさである。

実相寺寺主嚴蒼の部屋に聖人は相對座しておつた。

「ここ数年来の天変地異に対して、御貴職は如何にお考えでございますか」

聖人は嚴蒼に先ず問うた。

「まことに民のなげきこれより甚しいものはないとひそかに憂れえております」

「ではそれに対する救済の方法はないものでございましょうか」

「拙僧も畏しくも勅願寺たる岩本実相寺の住職でござる。日夜肝胆をくだく思いで、天下泰平の御祈念をいたしております」

「僧侶は天下の公器、所化小僧にいたる迄、天下泰平五穀豊穰は日夜祈らぬ者としては一人もおりません。しかるに、何故その祈りが達せられず、かくも数年来、天変地夭が打ち続き飢饉疫癘のたえまがないのでしょうか、この辺の消息を如何にお考えでしょうか……」

こう、つっこまれて問われては実相寺の住職嚴蒼も返答をいたし兼ねた。返答がないので聖人は更に言葉を続ける。

「去年の六月には加賀法師が雨乞いをいたし、七月には鶴が岡の隆弁僧正が雨乞いをなされたが、一向にその験がなかった。莫大な費用施物をつぎこんでの雨乞いの大法要も、祈禱をいたす僧侶の身になってみれば同情をいたすところもあるが、肝心な験が一向になくては、却って仏法を傷つけるものと、いわなければなりませんまい」

「免下さい……」

この時、挨拶をしながら、部屋に入って来た僧侶があつた。これは実相寺の学頭職にある智海法印である。

聖人は智海法印の顔をみると思わずにつこりとせられ、学頭もつりこまれて微笑をした。この兩人の無言の挨拶は住職嚴蒼には気に喰わなかつたようであつた。

「御両所ともお知り合いでござるか」

「いいや一向に」

と聖人は静かに答えたが智海法印は、

「鎌倉でのお噂をかねがね街道筋で伺っておりますので、愚僧には只今始めて拝顔をしたような気がいたしません」

なつかしゅうございます。さすがに、口の中でいったと思えるような学頭智海法印の返答であつた。法縁深厚と言うべきか、この学頭智海法印は後年名を日源と改めて上人の弟子になつた方

である。聖人が実相寺滞在中に摩訶止観の講義をされたのも、この学頭智海法印の請いに応じたのであった。思えば、後年結ばれた師弟のえにしの糸は、両者が言葉をかわさず微笑した瞬間に結ばれていたのであった。

「何か、お調べものでもあつて当寺へ参られたように伺っておりますが、不肖もふつつかながら一山の学頭職にあります。何なりと仰せつけ下されば、如何ようなる御便宜でも取りはからいます」

聖人が答えるよりも早く住職の厳誉が答えた。

「打ち続く天変地天について諸宗の祈禱が一向にきかぬ、よつて当山秘蔵の一切経を閲覽されて、何か新しい祈禱の秘法でも求めようと……まあ言うのかなか。近頃御奇特なお考えだが、この実相寺の厳誉のみるところでは祈禱の秘法も先ず先ず出つくして、そうそう目新しいものはないと考えるが、学頭殿、如何なものであろうかなあ」

学頭智海法印は聖人を前にして、自分の意見を吐くのに躊躇したが、厳誉の言葉に促されて、仕方なく返答をした。

「我が天台宗のことはともかくとして、真言宗においては、祈禱秘法の種は最早出つくしてしまつたと申しても差しつかえないように思われます。というのが、去年（正嘉元年）より北条時頼殿に抜擢されて奉行職になられた青砥佐衛門藤綱は、もと真言宗の僧侶でしたが、真言秘密の秘

法も祈禱も一向に験がなくて、天変地天が打ち続くばかりなのに腹をたてて還俗された方だと言われております。よって真言宗の御祈禱は必ず重くは用いられますまい。じゃと言うたとて、他の宗旨の御祈禱も、奉行のお人柄からみて、さほど重要視はいたしませんまい、余程漸新奇抜なものでない限りは……」

智海法印が話した青砥藤綱は鎌倉の滑川に落した銭を人夫を雇って拾わせたという話で有名な人である。妾腹に生れた末子であったために十一歳の時に、真言宗の僧侶になったが、後ち還俗をして二十八歳の折、北条時頼入道が三島明神に参詣した時、忍んでその供行列に加わった。その帰途、江之島近くの片瀬川を渡る時に、牛が尿を川中にしたので「時頼殿の仏事のまねをする牛め」と牛を罵った。それが上役の耳に這入り、如何なる所存かと問われた時に、おくする気色もなく「ここ数十日来雨がふらず、御覽の通り田畑の葉が枯れておる。この牛も川の中に小使せず田畑の近くで小使したら、その尿が役にたつて諸民の憂いは幾分でも救うことが出来たであつたらうに、もつたいないことをしたものだ。それは丁度、時頼入道殿がなさつておる仏事に全く似ておる。何度も何度も莫大な費用をかけて諸宗の僧侶に御祈禱を頼んでおられるが、その莫大な費用を飢に泣く民百姓に直接施した方が遙かに衆生を救う道である。しかも施物を受ける僧侶といえ、殆ど北条氏一族の末子か、評定衆の末子ばかり、財宝に不足しておらないところに財宝を施しておる。これこそ早魃に牛が川中に尿をするようなものである」と答えたのである。こ

のことをきいた二階堂信濃入道が時頼入道の耳にこれを入れたので、時頼も大いに反省し、一躍青砥藤綱を抜擢して善政を布き当代の名奉行と言われたことは北条九代記に載せるところである。

「日蓮も奉行青砥佐衛門藤綱殿の話は聞いております。理財経済こそ人を救う道なりと考えられた奉行藤綱殿は、朝夕の膳部には乾した魚と焼塩のみしかつけないと言われる程の質素を旨とし、善を賞し悪をこらし、全国に渡って正邪を訊すこと三百人と言われる一代の善政を布かれたが、それでも天の御気色は一向に変わることなく、天変地天は続いて、都大路に飢え死んだ人々の骸骨が累々と横たわる仕末であります。これは一体如何なることでありましょうか。藤綱殿も祈禱では一向にきかぬからと還俗されて、今度は精神よりは物であると、諸民の救済を心がけられて一生懸命であるが、一向にきかぬことは真言宗の祈禱と五十歩百歩であると悟られて、今こそ思い悩んでおられるだろうとこの日蓮も同情に堪えません。そもそも、天変地天を退治しようと祈禱の熱汗がすより、何故、近年より近日に至る天変地天飢饉疫癘が起るかと思えばなりません。因を探ぐらずして果を語るなかれ、天変地異のよつてもつて起る原因がわかれば、退治の秘術を探り得たと同然です。「三界は我が有なり」と仏は言われた。しからば、この三界に起つた天変地天もまた、所作仏事と考えねばなりません。よつて日蓮は、五度目の一切経閲覽を当山実相寺の経蔵において企て、この天災地天に対する仏の御声をきこうと思つて鎌倉より来たのでございます」

「では御伺いたしますが、経文の中に、これを信ずれば天変地夭が絶対に起らないぞと説くような経典がありませんか」

実相寺の裏山、岩本山の中腹にある経蔵の前で、十四、五歳の小僧が真剣な顔をして聖人に質問をしている。

「それはある。法華経の経文の中に、この法華経のような尊い教が世の中に行われれば、天上界のものがみなこれを守護して、百由旬というような広い間に、災難もなく、人が病気にかかったりすることがないとある。また涅槃経の中にも同様なことが書かれてある。この大涅槃微妙の経典が世の中に行われておれば、その世の中は安全である、その地は金剛である。その地が金剛であれば、そこにすんでいる人間もまた金剛の如く、極めて安全で何等の禍を受けない。また仁王経の中には、仏のお説きになる大乘の教というものは、千の光を放って、千里の内には七難の起らないように護るだけの力があると書かれてある」

「法華経や涅槃経、仁王経等にそのような仏のお言葉があるにもかかわらず、ここ数年来、大地震、非時大風、大飢饉、大疫病等々の種々の災難が連綿として今にたえないのは、その仏のお言

葉が、どうしても木当とは思われませぬがいかがでしょうか」

「法華經、涅槃經等々の經々が国土にありながら、仏の金言が虚しくなつて災難の起きるのには、それ相当の理由がある。金光明經には「その国土においてこの經ありと雖も未だ嘗て流布せず、捨離の心を生じて聴聞せんことをねがわず……その国に当に種々の災いあるべし」とある。大集經、仁王經にも同様なことが書かれておる。これ等の經文をもつて考えると、法華經のような大乘經典が国中にあつても、世間の人がすててこれを聴聞し供養するの志を起さなければ、国中の守護の善神や一切の仏様もこの国を捨て去つてしまふ。守護の善神や聖人がない故種々の災難が起つてくるのである」

「ではそのような尊い法華經を一切世間の人が捨て去つてしまつて、聴聞をしないと云うのは何か原因がある筈ですが、その原因は一体なんでしょうか……」

「名利を求める僧侶が出るといふことが根本の原因であると仁王經には説いておる。

仏様の教えを弘める者は、一切の煩惱をはなれ、名誉も要らなければ利益も要らないというよくな心持てなければならぬのに、その反対で、専ら名利を求めて、国王とか太子という人達の前へいつて、その人達の意を迎えて間違つた教を説き、国を破壊するような教を説く、国王や太子もついにはこれに迷わされて間違つた教を信ずるようになって、その間違つた教を本にして国の法律や制度を立てるようになる。従つて国の一切の事侍か間違つてくるからその国が破れた

り、また仏法がほろびたりする様になる。こういうことが仁王経の中に説いてある。また法華経の勸持品の中にもそのことが説いてある。世の中が末になると、僧侶の中にも心がよこしまで、仏の精神がよく解りもしなくせに解つたような氣持になり、非常に慢心を起す者がある。そういうものが自分の地位を保ち自分の勢力を維持する為、法華経を弘める者を敵にしてこれに迫害を加えることを計画する。法華経を弘める正しい人を陥れようと思つて国王や大臣その他の世間の有力者また同心の僧侶に向つて「あれは邪見の者である、あの者の説くことは仏法ではない。外道の説を仏法であると偽つて説いているのである」と法華経を弘める人の悪口を放つのである。以上は勸持品に説くところである。現在打続くところの災難の原因が実はこのようなどこにあるのを誰一人として知るものはないのである」

「仏教以外の者が仏法を破ぶる説をなすのならば承知が出来ますが、僧侶の中から仏法を破ぶる異説を吐く者があらわれてくるなどとは一寸合点が出来ませんが、それも経文に証拠がありますか」

「仁王経には「三宝を護る者にしてうたた三宝を滅破せんこと、獅子の身中の虫が自ら獅子を食うが如し」とあり、又法華経の中にも、仏の方便や手段のための説を知らないで、この法華経を弘むる者を悪口したり迫害を加えたりするとある。涅槃経には、はっきりと仏様が予言をしておる『我が涅槃の後、まさに百千無量の衆生あつて、誹勝して此の大涅槃を信ぜざるべし』以上は

すべて仏の説を破る者は、すべて自ら仏弟子と称する仲間から出ると言う經文の証拠である」
「それならば、打ち続く天災は眼前の事実であるから、そのような仏弟子は誰でありますか、その証拠はどんなものですか」

「法然上人つくるところの撰択集がその証拠である。最後にあげた經文に照らし合せて、その由縁を明らかにしてみよう、日本中の上より下に至る迄、すべての人が法然上人を信じて、この撰択集をもてはやし、争ってこれを読み念仏以外のものは「捨てなければならぬ、閉じなければならぬ」、さしおかなければならぬ、なげうたなければならぬ」と称して「捨閉闍拠」といつておる。唐の貞元年中の經典の目録によれば、大槃若經六百卷から始めて、法常住經に至る、大乘の諸經総て六百三十七部、二千八百八十三卷もあるが、法然上人は弥陀の三部經以外はこれを用いてはならぬと撰択集で言われておる。三界は我が有なりと言われた釈迦如来を全くさしおいて他方無縁の阿弥陀仏のみを礼拝致しておる、これが即ち近年の大災の根本なのである」

三

「あめつちの、分れし時の、神さびて、高く貴き駿河なる、富士のたかねを、あまの原ふりさけ見れば、渡る日の光もみえず、白雲も、い行きはばかり、時じくぞ、雪は、ふりける、語りつ

ぎ、言ひつぎゆかむ、富士のたかねは、

反 歌

田子の浦ゆ、打ち出でみれば、真白にぞ、富士の高ねに、雪は降りける」

これは、山部赤人が富士山を望んで詠じた歌としては余りにも有名な歌である。

実相寺の裏山岩本山の頂上に登った聖人は先程から、小僧を相手にして、万葉集を引いて富士を語っているのだった。

岩本山から望んだ富士もまた見事である。脚下には富士川の奔流をみて、遙かに雄大な富士に對する。急流奔流干のほこをつくが如しと聖人が形容した富士川のはては、静かな駿河の海に這入って静もりかえるが、万代に動かざる静かな富士の山は頂上に東西南北に去来する雲を得て却つて動的であることもまた妙である。富士に對すれば、天子嶽はその名前に似合わず、ごくささやかな山である。

聖人はこの風景を前にして、今日も一切経閲覽の勞を慰やしなから、この寺の小僧と仲よく話されていた。話題が眼前にある富士山になることも当然である。

「小僧、歌は詠んでもよいが、富士山の歌だけはよまぬがよいというぞ」

「それはいかなる訳でございますか」

「先程申したなあ、あの山部の赤人の田子の浦の歌、あれ以上のものは如何なる歌人が詠んで

も、それ以上に詠めぬと言う話があるのだ。そう思つて歌つてみよ、よい歌ではないか、どうだなあ」

「小僧もそう思います。お聖人様は歌をお詠みになりますか」

「私は歌よみではない。しかし京都で十八年程以前になくなられた、あの有名な藤原定家卿に京都でお逢いいたして、いろいろと歌道のことは伺つたことがある。定家卿の富士を歌つたものとしては、

なかなか雲より上はいざ知らず

みえぬ程も高き山哉

というのがある、定家卿が亡くなつた年より（仁治二年八月）四年程前になくなつた家隆の歌として、

余の山の高根高根をつたひ来て

富士の裾野にかかる白雲

というのがある。家隆の歌もよい。ああやつて今富士の裾野にかかつておる白雲も、よの群山の高根をつたわつてきたのだが、富士山にきてみれば、その高さは裾野をめぐる白雲にすぎぬという意味であろう。歌そのものもよいがなかなか寓意のある歌といふべきだ。私は富士が大好きだ。法華経と富士、どこかに似たところがある。法華経は八軸、富士は八朶の霊峰、法華経は於

一切諸經中最為第一、富士は本邦一の高山、法華經は一切衆生のたましいであるが、富士は日本国一切衆生の心の故郷といつてもよい。富士は人の世の姿とも言うが、法華經は三界の実相でもある。私はだから何時でも富士の見えるところに棲みたいと願つておる。今すんでおる松葉が谷の名越の草庵からは富士が毎日のようにみえる。だが名越の草庵からみた富士の姿は、まるで雲の一部分のようだ。空にうかんでみえるのだ、ここでみるように富士のあしもとがみえない。ここでみる富士は、大地にしつかりと根ざして大空に立上つておるようみえる。私の母親がいつも私に言つておつたことがある。それは、私を産む前にみた夢の話だよ。なんでもある夜、比叡山の頂きに腰をかけて、近江の湖水で手を洗い、富士山から出る日輪を、だいたと思つた不思議な夢をみたそうである。私が自ら日蓮と名乗り、生れながらに富士がすきだということも次第因縁の故であらう。

そして今法華經の内容たる南無妙法蓮華經を四天下にこれを弘通しようとしている。小僧わかるかなあ私の心持が」

「はい、その気概はわかります。私どもも毎日のようにこの富士を眺めて心を清くしておりますが、大切なのは人の心で、いくらこの富士をみておりましたも、邪しまな心のもは一向にその邪しまな心がなおりません」

「田子の浦の逆さ富士も、影をおしむ訳ではあるまいが、波風の立つ日はその富士の姿もうつる

筈がない訳だ」

「お聖人様は、鎌倉にも一切経所蔵の寺々がある筈でしょうに、何故にこんな都に程遠い、実相寺などに閲経にいらつしやつたんでございますか」

「鎌倉には鶴が岡の八幡宮に一切経を所蔵しておるが、富士がみえない、富士がみえないからここに閲経に参つたのだよ、理由はそれだけじゃ。智者大師は天台山をひらき、伝教大師は比叡山をひらく、今日蓮も法華経をもつてこの富士山をひらこうかと思つておるのじゃよ、わあつはは……」